聖霊降臨後第２２主日（特定２７）　　復活論争　　２０２２．１１．６．
（宮崎用）
１１月は教会の暦の最後の月にあたります。伝統的には１１月１日が諸聖徒日、２日が諸魂日ということで、この世での生活を終えた人々のことを思い、そしてやがて私たちにも訪れる、死のことを考えるように、設定されています。そして今日の聖書日課も死の問題を取り上げています。

私は何度かの聖地旅行をして、２度ほどエジプトの考古学博物館にも行ったことがあります。また福岡市美術館へ大英博物館の古代エジプト展にも行って、エジプトの宗教文化に触れたことがありました。古代エジプトでは、人は死んだ後、危険な旅を続けると考えられていました。旅に待ち受ける困難を克服して、復活を果たすために、呪文を唱えなければならない、ということで、死んだ人の遺体を入れる棺には、呪文の言葉が書かれていました。復活するまで、道に迷わないようにするためのガイドブックのような「死者の書」というのも展示されていました。エジプト人は、復活とか永遠の命などを信じていたのでしょう。

さて、それでは、イスラエルの人々は、死についてどのように考えていたか、ということなのですが、イスラエルの人々は、長い間、死後には生命はない、と信じていました。たとえば、詩編の６編６節では「死の国へ行けば、だれもあなたの名を唱えず、陰府に入れば、だれもあなたに感謝をささげません。」と言っています。人は死んだら善人も悪人も、陰府の国に行くのだとされ、そこは、光も音もなく、苦しみも喜びもなく、神様もいなくて、すべてが無に帰す場と考えられていたようです。そんなイスラエルの人々が、死後の命とか、死者の復活ということを、信じるようになったのは、イエス様の生まれる２～３百年くらい前頃から、つまり旧約の時代の終わり頃です。

今日の旧約には、ヨブ記が選ばれています。ヨブは、神様に忠実に仕えていた義人と呼ばれる人でした。ところが、彼の子どもたちがみんな亡くなり、財産も奪われます。そして、彼自身もいやな皮膚病に侵されて、不幸のどん底に落とされます。

ヨブは、友人たちに自分の苦しみを訴えました。少しでも慰めてもらおう、力になってもらおうと思うのですが、彼らはヨブの罪を指摘して、その傲慢さを責めます。そんな悩みの中で、彼は、自分を助ける神様が、自分の死んだ後に、もう一度自分を救い、生かすために地上に立たれる、という信仰に到達するのです。

ヨブ記１９章２５節からです。
『19:25 わたしは知っている／わたしを贖う方は生きておられ／ついには塵の上に立たれるであろう。
19:26 この皮膚が損なわれようとも／この身をもって／わたしは神を仰ぎ見るであろう。
19:27 このわたしが仰ぎ見る』

しかし、それから２００年くらいして、イエス様の時代になっても、サドカイ派と呼ばれる人たちは、復活ということを信じていませんでした。彼らはユダヤ教のリーダーで、身分の高い人たちですが、ローマ帝国と仲良くして、自分たちの裕福な特権階級の生活、つまり現世の生活を楽しんでいましたので、死んだ後に望みをかける、という気持ちがなかったのです。

この人たちは、旧約聖書の時代の終わりごろに書かれた、ヨブ記などは聖典とは考えず、最初の５つの書物。モーセ五書と呼ばれるものだけを大切に読んでいたのです。彼らが、死んだ後の命について考えられることは、死んでゆく自分に代わって、命をつないでくれる子孫が栄えることだけでした。

でも、イエス様は、人間が死んだ後の世界は、この世とは違ったものであることを教えてくださいました。次の世では、永遠に生きることができるので、もはや命を次の世代に伝えるために、めとったり、嫁いだりする必要はなく、みんなが天使のようになるんだ、と言うのです。そして、サドカイ派の人たちが信奉している、モーセ五書を引用して、神様がモーセに語りかけられた時、ご自身のことを紹介するのに、もうその時には、とっくに死んでいる先祖たちの名前を挙げて、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」と言われていることを指摘されました。これは「わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であった。」という、過去形ではなく、「今も彼らの神である。」と現在のこととして語っているんだ、という指摘が大切なのです。この世においては、全く過去の人物でも、神様から見たら、現在も生きている者として、その人の名前を呼びかける神様なのです。

詩編６編６節で、「死んだ人間は、神様の名前を呼ばない」と言われていますが、たとえその人がこの世を去っても、神様の側では、「アブラハム」「イサク」「ヤコブ」というふうに、声に出して呼び、決して忘れることがない。聖書のはじめに、神様が、「光あれ」と言われたところから、天地創造が始まりました。神様が名前を呼ぶと、それは存在するのです。神様が声をかけてくださるのだから、死んだ人も、復活の望みがあるんだ。ということでしょう。

人間は死んだらおしまい、ではなく、生きている者と同様に、覚えられている存在なのだ、とイエス様はおっしゃるのです。

わたしたちも、ヨブと同様、生きている間にいろんな悩み、苦しみを抱えて、特に親しい人を失うという状況に陥ります。しかし、イエス様が、今日の福音書の最後に言われた、「すべての人は、神によって生きている。」という言葉を受け止めましょう。その生きている、というのは、単にこの世で肉体を持って生きていることだけではなく、生きている人も、この世を去った人も含めての言葉です。

ヨブ記と同じ、旧約聖書の時代の終わりごろに書かれた「コヘレトの言葉」という書物を御存知でしょう。昔は「伝道の書」と言われていました。「空しい」という言葉を何度も繰り返す書物ですが、終りの方で、「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」（１２：７）と語っています。肉体は土から作られたが、命の息を神様から吹き入れられたので、人間はこの地上に肉体と霊とが一緒になって、生活しています。しかし、この世の生活が終ると、肉体は塵となって大地に帰り、命の息である霊は、神様のもとに帰ってゆく、という聖書の思想が現われています。

肉体から別れて、この世の生活を終えた人も、神様につながって、別の状態で生かされている。そして、私たちもその交わりの中に入っていることを、この「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」という神様の自己紹介の言葉からも学びたいと思います。